

認知症（痴呆性）高齢者グループホームの生活に影響を与える環境要素に関する研究

石井研究室 大槻 絵理
長谷部 里美
伊藤 志門

キーワード： 認知症（痴呆性）高齢者グループホーム，
環境要素，空間利用，生活様態，介護行為

1 研究の背景

認知症(痴呆性:以下認知症とする)高齢者の居住・介護の切り札として登場した認知症高齢者グループホームは04年12月現在全国に6000ヵ所以上ある。

小規模な空間形態および生活のグループ規模ではあるが、そのあり方は多様なものがあるといわれている。目覚しく普及が進む中で、その多様性の中に見られる「質」が議論されている。

2 研究の目的

本研究では、2つのユニットからなるグループホームを対象に、ユニット毎にみられる生活や介護の様態とその相違を明らかにすることで、グループホームの生活に影響を与えている環境要素を抽出していく。空間構成、入居者の空間利用や生活様態、介護スタッフの空間利用や介護の様態とその相違を丁寧に分析していくことで、グループホームの「質」や「相違」がどのような要因によってもたらされているのかを明らかにすることで、グループホームの空間や介護のあり方を考察する手がかりを得ることを目的とする。

3 調査方法

調査対象施設は、宮城県川崎町の認知症グループホームKホームにて調査を行った。

調査は、入居者・スタッフの行動観察調査(7:00～19:00)により10分毎に入居者・スタッフの滞り場所、行為、周囲状況などを詳しく観察し二日間記録した。

一日目は入居者・スタッフの居室を除く空間(共用空間)での滞りの様態、行為の観察・記録を行った。二日目は、食堂・リビング、キッチンに焦点をあて、

入居者・スタッフの会話や関わり方なども含めてより詳細に観察・記録を行った。

4 施設の概要

調査対象施設は、2つの異なったユニットから構成されていて、定員は各ユニット共に9名で2ユニット計18名の認知症高齢者グループホームである(図-1)。ユニット1は、中庭を中心とした回廊型で、ユニット2は、中廊下型と異なった空間構成からなる。

5 入居者の空間利用と行為

5-1 入居者の属性

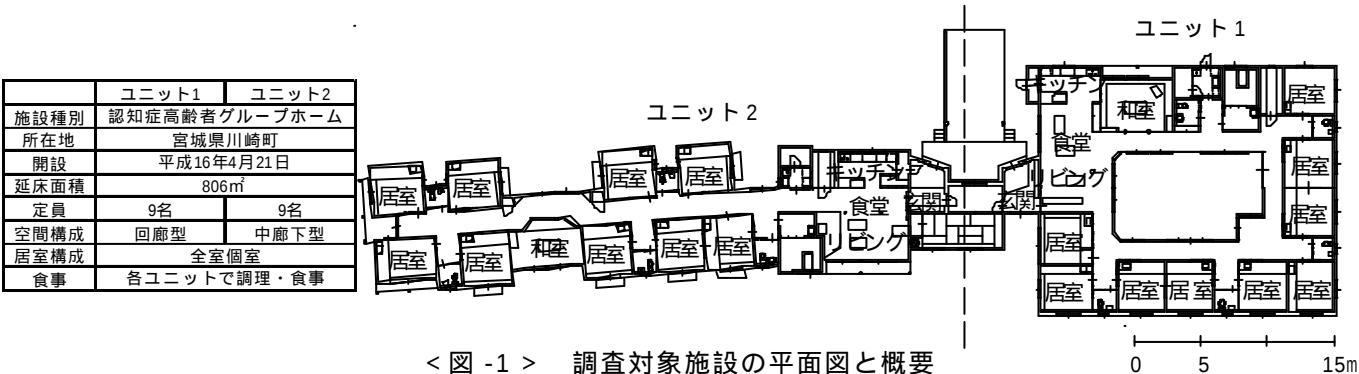
ユニット1とユニット2の平均要介護度は3.0と同じだが、入居者それぞれで見ると自立度・認知度が異なる<表-1>。

5-2 ユニット別にみた入居者の空間利用

ユニット1の空間利用を見ると居室が34.0%、食堂・リビングが48.3%、キッチンが1.5%、その他が16.2%となっている。一方ユニット2の空間利用は、居室が21.9%、食堂・リビングが60.4%、その他が15.3%となっている。両ユニット共にその他はトイレ、和室などである。

和室の利用状況をみると、ユニット1は和室から共用空間が見えるため和室も共用空間の一部として利用する入居者がいる。ユニット2は共用空間から和室がはなれているため徘徊時の休憩や、外を見るために座ったりと「止まり木」的な場として利用されており、その利用のされ方には違いがある。

ユニット1とユニット2の空間利用を比較してみると利用空間の割合に違いがみられる。ユニット1では食堂・リビングが約50%弱であるのに対して、ユニッ

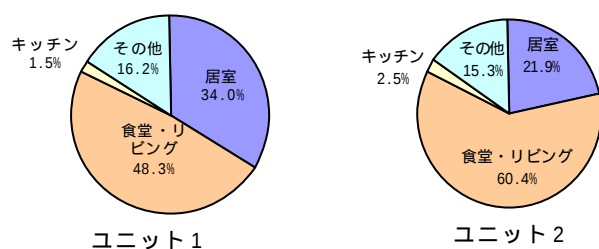


<表 -1> 入居者別にみた属性（左：ユニット1、右：ユニット2）

ユニット1					
氏名	年齢	性別	入居前	要介護度	認知度
A1さん	85歳	女性	自宅	要介護1	
B1さん	88歳	女性	老健	要介護1	
C1さん	83歳	女性	特養	要介護1	
D1さん	85歳	女性	老健	要介護5	
E1さん	76歳	女性	自宅	要介護3	
F1さん	96歳	女性	特養	要介護5	
G1さん	91歳	女性	老健	要介護3	
H1さん	83歳	女性	病院	要介護4	
I1さん	89歳	女性	自宅	要介護3	
平均	86歳			要介護3	

ユニット2					
氏名	年齢	性別	入居前	要介護度	認知度
A2さん	92歳	女性	自宅	要介護3	
B2さん	84歳	女性	病院	要介護4	
C2さん	92歳	女性	自宅	要介護3	
D2さん	75歳	男性	自宅	要介護4	
E2さん	66歳	男性	病院	要介護3	
F2さん	90歳	女性	老健	要介護2	
G2さん	98歳	女性	自宅	要介護4	
H2さん	88歳	女性	自宅	要介護1	
平均	86歳			要介護3	

要介護度は1～5で値が大きいほど介護が必要となり痴呆度は～で値が大きいほど重症である。



<図 -2> ユニット別にみる空間利用

ト2では60%を超えている<図-2>。その分居室の利用割合がユニット2はユニット1の2/3程度と少ない。

5-3 ユニット別にみた入居者の行為

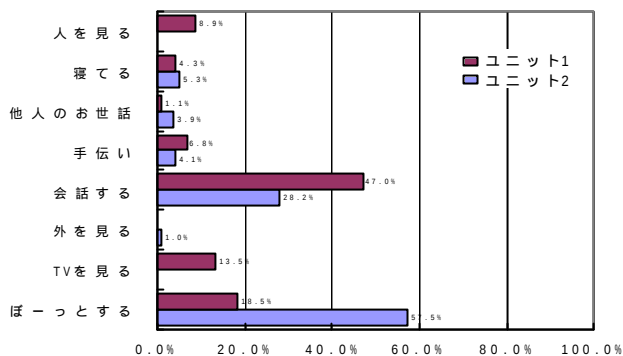
次に入居者の行為を分析した。ユニット1では「ぼーっとする」が18.5%、「会話をする」が47.0%、「寝ている」が4.3%、「手伝い」が6.8%、「他人の世話」が1.1%、「外を見る」が0.0%、「TVを見る」が13.5%、「人を見る」が8.9%となっている。一方ユニット2では「ぼーっとする」が57.5%と非常に高く、「会話をする」が28.2%、「寝ている」が5.3%、「手伝い」が4.1%、「他人の世話」が3.9%、「外を見る」が1.0%となっている。

ユニット1とユニット2の行為を比較してみるとユニット1では「会話」が約50%と全体の半分を占めていて「ぼーっとする」が約20%であり、ユニット1の入居者たちは入居者同士が会話をしながらすごしている様子がわかる。一方、ユニット2では「ぼーっとする」が約60%と高く、会話も少なくユニット1との違いが明らかである<図-3>。

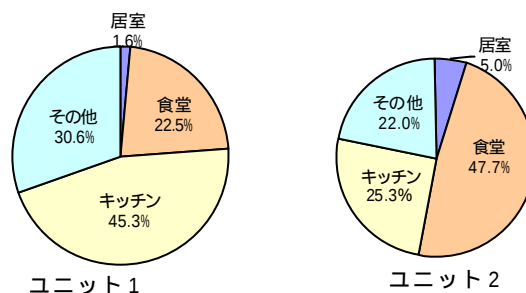
6 スタッフの空間利用と行為

6-1 スタッフの空間利用

スタッフの空間利用をみると、最も割合が多いのは、ユニット1ではキッチン(45.3%)、ユニット2では食堂(47.7%)である。次いでユニット1では食堂(22.5%)、ユニット2はキッチン(25.3%)となっている。ユニット1、ユニット2共にキッチン、食堂に滞在する割合が約70%であり、スタッフの生活の大半がキッチン、食堂で行われていることがわかる。



<図 -3> ユニット別にみる行為



<図 -4> スタッフの空間利用

ユニット1の空間構成はキッチンと食堂との間に隔たりがなく、スタッフがキッチンにいながら食堂にいる入居者と時間と空間を共有できる配置がある。入居者もスタッフもお互いの動きを見ることが出来る。それに対して、ユニット2はキッチンと食堂の間には廊下があり、空間として分離している。またキッチンにスタッフがいるときは、入居者に背を向けている状態になるので、お互いの動きを見ることはない。空間での滞在割合の結果以上に、そこでの滞在の様態には違いがある<図-4>。

6-2 スタッフの行為

ユニット1、ユニット2共に生活支援(身体的な介護ではなく声掛けや、よりそい、食事の準備などの行為)の割合が最も多い。しかし、ユニット1では66.4%、ユニット2では39.9%と割合に違いが見られた。両ユニットの入居者の介護度は同様であるが、介護の質に相違があることは興味深い。次に割合が多いのは、ユニット1では基本介護(食事や排せつなどのか

かわる直接的な身体介護）、ユニット2では環境整備である。

ユニット2の特徴として、環境整備が多いことが挙げられる。ユニット1の2.9%に対し、ユニット2は22.9%である。この違いは、掃除時の方法(ユニット1では1人のスタッフが集中的におこなっていたのに対して、ユニット2では全スタッフが一齐に行うなどの違い)の違いから生まれたものである<図-5>。

7 入居別にみた生活行動の特性

以下では、入居者別に空間利用や行為など、生活行動の特徴を明らかにする。

ユニット1、ユニット2それぞれの入居者の空間利用からその特徴を分類すると、居室型と食堂・リビング型の2つのパターンがみられることが明らかになっている。居室型はユニット1では3人、ユニット2は1人である。食堂・リビング型は、ユニット1では6人、ユニット2では8人である。ユニット2の入居者は、食堂・リビングに滞在している割合が高い食堂・リビング型が多い。

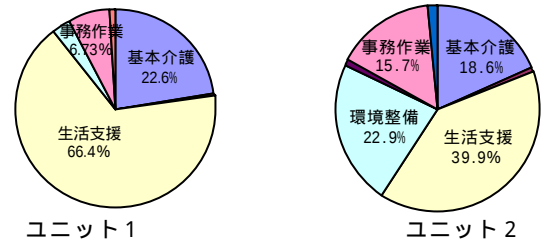
食堂・リビング(共用空間)での主な行為として挙げられるのは、「会話」、「ぼーっとする」、そして「人を見る」行為である。ユニット1では会話する人の割合が多い。ユニット2では、ぼーっとしている人の割合が多い。

両ユニットの同介護度の人の生活行動を比較しても、その特徴がみられる。たとえば要介護1の入居者を比較してみると、いずれの入居者も自立していて、他の入居者のお世話をしたり、スタッフの手伝いをしたり、ユニットの中心的存在になっており、大きな違いは見られない。しかし、要介護4の入居者を比較してみると、ユニット1の入居者は、会話をする光景がよく見られるのに対し、ユニット2の入居者はぼーっとして過ごすことが多いなどその違いがみられる<表-2>。

8 会話や関わりからみた入居者とスタッフの関係

両ユニットにおける入居者間、スタッフと入居者との関係を、会話や関わりの頻度、その内容から考察する。図-6は分析から得られた関係を食堂・リビングのテーブル・座席の配置関係に落としたものである。

ユニット1ではテーブル1の入居者間と、スタッフによる会話が中心である。テーブル2の入居者間では会話がないうが、スタッフは声がけにより、関わりを持っている。ユニット2はテーブル1においての、A2さん、B2さん、C2さん、スタッフによる会話が中心となっている。他のテーブルの入居者間では会話はほとんどみられず、スタッフもほとんど関わりを持たな



<図-5> スタッフの行為

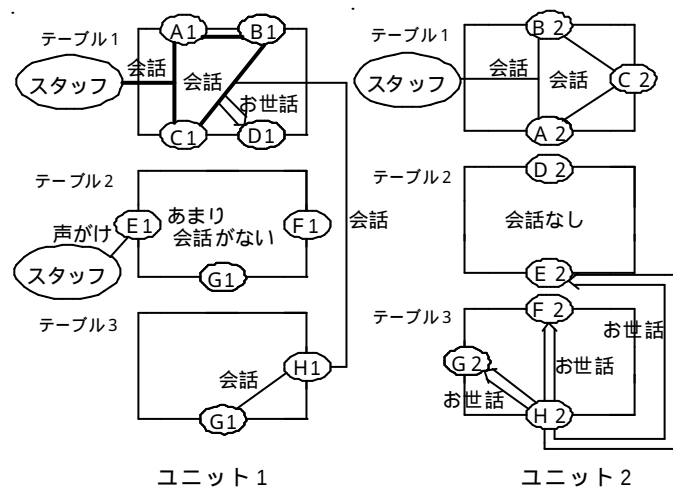
<表-2> 入居者別にみた生活行動の特性と事例

ユニット1	主な利用空間と割合	主な行為と割合
A1さん	居室 41.1%	会話 68.4%
B1さん	食堂・リビング 69.9%	会話 34.1%
C1さん	食堂・リビング 49.4%	会話 71.1%
D1さん	食堂・リビング 81.3%	ぼーっとする 7.4%
E1さん	食堂・リビング 50.0%	人を見る 45.5%
F1さん	食堂・リビング 46.6%	ぼーっとする 35.7%
G1さん	居室 60.3%	ぼーっとする 57.1%
H1さん	食堂・リビング 47.3%	会話 74.2%
I1さん	居室 74.7%	会話 90.0%

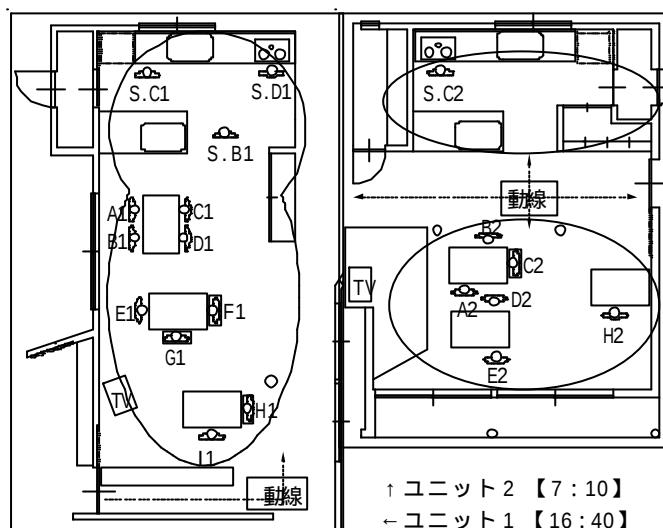
ユニット2	主な利用空間と割合	主な行為と割合
A2さん	食堂・リビング 69.2%	会話 92.3%
B2さん	食堂・リビング 60.2%	会話 79.0%
C2さん	食堂・リビング 53.9%	ぼーっとする 62.5%
D2さん	食堂・リビング 74.0%	ぼーっとする 88.2%
E2さん	食堂・リビング 54.6%	ぼーっとする 97.7%
F2さん	食堂・リビング 75.6%	ぼーっとする 93.7%
G2さん	食堂・リビング 59.4%	ぼーっとする 68.2%
H2さん	居室 45.5%	ぼーっとする 50.0%

ユニット1 C1さん(要介護1) スタッフや入居者とよく世間話やTVを見ながら話していることが多い。おしぼりを配ったり、おやつを配ったり、スタッフのようにみんなのお世話をしている。ユニットの中心的存在である。A1さん、B1さん、C1さん、スタッフで話していることが多い。	ユニット1 H1さん(要介護4) 車椅子で生活している。食堂(共用空間)に居ることが多い。TVを見たり、入居者やスタッフと話をしている。食事が終わると居室に行くが、午後のおやつが終わると食堂にいて、周りの人と話している。自分の席を移動して他のテーブルに座り、入居者と話をしている。
--	---

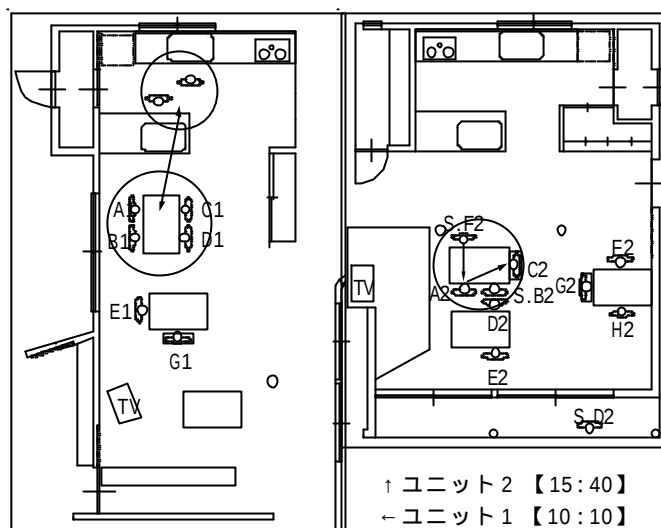
ユニット2 H2さん(要介護1) ユニット2の中で一番気が利く入居者である。自分の周りの入居者たちの食器を片付けてあげたり、暗くなってきたらスタッフに言われなくてもカーテンを開けたりと自立した行動をとる。スタッフに何か頼まれても嫌とわずに素直に従う。	ユニット2 G2さん(要介護4) 車椅子で生活している。テーブルにいるときはぼーっとするか寝ている。同じテーブルの入居者との会話もなく、スタッフに話しかけられても「うー、あー」という返事しかない。車椅子移動でいつもはスタッフと一緒に移動するがたまに一人で移動する。
--	---



<図-6> 入居者とスタッフの関係図



< 図 -7 > 場面からみる空間構成と生活様態



< 図 -8 > 場面からみるスタッフと入居者の関わり

い。ユニット1では、A1さん、B1さん、C1さんの3人がD1さんをお世話しているのに対し、ユニット2ではH2さんが、E2さん、F2さん、G2さん3人のお世話を1人でしている< 図 -6 >。

9 入居者別にみた生活構成の特徴

以下では、いくつかの生活場面を例に取り、具体的に空間構成と生活との関わり、スタッフと入居者との関わりを見てみることにする。

9-1 空間構成からみる比較考察< 図 -7 >

ユニット1の空間構成は、中庭を中心とした回廊型で、食堂・リビングとキッチンが一体化している。さらに通路（廊下）が食堂・リビングをさえぎらないため、入居者の生活を妨げることなく移動が可能で、落ち着いた雰囲気をつくりだすことが可能となっている。和室は、食堂・リビングのとなりに位置しているため食堂・リビングの雰囲気を感じながら休憩したり、和室から食堂・リビングにあるテレビを見たりして利用できる。

一方ユニット2の空間構成は、中廊下型で食堂・リビングとキッチンが廊下によって分断されているため、入居者の生活と居室やユニット1への行き来の動線が混在し落ち着かない雰囲気を与える。ユニット内に訪問者が訪れた場合などにおいても、直接入居者が滞在している共用空間に入り込むような構成になっているため、急に他人が自分たちの家に入ってきたような感覚を与える。さらに居室も共用空間から離れており、一歩外にでても食堂・リビングが見えない（感じられない）ために、居室ゾーンと共用空間のゾーンとがまったく切り離されてしまっている。和室は食堂・リビングから離れているために、ほとんど利用されていないが、徘徊の時の休憩で使われたり、和室に座って外を眺めたりとユニット1の和室とは異なる使われ

方をしている。

9-2 スタッフと入居者の関わりからみる比較考察< 図 -8 >

ユニット1では、入居者間、スタッフと入居者の間で会話がが多い。会話の核となる入居者3名（A1, B1, C1）がスタッフがいるキッチンのそばにいることにより、スタッフとの会話も生まれやすい状況がある。キッチンとの距離も近いことがコミュニケーションをうながすのに影響しているものと思われる。また、スタッフは他のテーブルにも気を配りながら、声がけを行ったり、滞在して会話をしたりといった行為が見られる。

一方ユニット2は、動線によってキッチンとリビングが分断されていること、ユニット1に比べて距離があることにより、スタッフと入居者間の会話が多く見られない。スタッフの滞在も比較的会話があるA2, B2, C2のテーブルに限定されており、他のテーブルの入居者とはあまり関わりを持たないため、会話も生まれない。空間の構成がスタッフの行動に影響を与えているのに加えて、スタッフの入居者へのかかわり方の違いもあり、それが両ユニットの雰囲気の差を生み出しているとも言える。

10 まとめ

2つのユニットにおける空間構成・生活・介護などの実態をとおして、2つのユニットに生じる相違の要素を明らかにした。今回の結果からは、わずかな空間の違い、入居者の違い、スタッフの違いによって、大きな相違が生み出されることが示された。

今後は、調査・分析方法などを検討するとともに、これらの相違を生み出す環境要素とそれらの相互の関係をより明確にし、さらには高齢者の施設計画における建築計画的な視点からのアプローチの仕方を追求していきたい。